

春の歌

田地文子

春の歌

円地文子

春の歌

昭和四十六年五月二十四日第一刷発行

著者 〓 田地文子

発行者 〓 野間省一

発行所 〓 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号 一一二

電話 〓 東京 (九四五) 一一一一 (大代表)

振替 〓 東京 三九三〇

印刷所 〓 東洋印刷株式会社

製本所 〓 黒柳製本株式会社

定価 〓 六九〇円 落丁本、乱丁本はおとりかえします。

© 田地文子 昭和四十六年 Printed in Japan



目次

春の歌

七

潜

三五

指

五七

宝石

九一

鉋

一二三

年上の女

一四九

谷中清水町

一八一

半世紀

二二七

版 画 丹 阿 弥 丹 波 子
装 幀 枡 折 久 美 子

田
地
文
子
作
品
集

春
の
歌

春の歌

春がきた 春がきた

どこにきた

山にきた

里にきた

野にもきた

澄んだはりのある肉声が整はない音律のままに、空の蒼あをと地上のみどりを一つ色に溶き薄めた軟かい昼下りの光線の中で不似合ひなほど冴々と弾んで聞える。

女の子は赤らんだ頬にそよ風が髪を逆撫でするのにうるささうに首を振り、手を一ぱいにひろげて、鳥の羽ばたくやうに足にさはる若草を飛びこえ、ふみしだきながら、歌ふのをやめない。

鳥がなく 鳥がなく

どこでなく

山でなく

里でなく

野でもなく

女の子の小鳥のやうに軽い足の前に去年の枯草を残しながら、若みどりに埋まりかけてゐる小川の浅い窪みがあつて、壊^くえた土の下に細く綺麗な水がせはしなく流れつづけてゐる。

女の子は、何のためらひもなく、水際の枯^{かれ}萱^{かや}を折り敷いてしやがみ、流れつづけてゐる水に自分の顔を映す。

薄日を滲ませて白い空をやどした水は女の子の赤らんだ丸い頬を平たい横長い縞に書きしわめ、微笑も生気も、青い液体のおどけたゆらぎに変へて行つた。

女の子は、自分の顔が水の化物にされたのを怒つたやうに、乱暴に裸足の片足を冷たい水の中につけ、ぐるぐると、流れを足でかき乱した。浅い、冷い流れは、土踏まずの

よくくびれた甲の厚い小さい足先きに攪拌されて、ひとしきりしぶきを上げたり、逆巻いたりしたが、やがて、闖入者の狼藉が静まると、その踵から、足さきへかけて、なだめるやうな、なぐさめるやうなやさしい曲線を描きながら、そのまはりをすりぬけて行く。

女の子はそれを見てから又、岸へ足を引き上げる。

ぬれて、冷い片足を拭きもしないままに、女の子は、がたがた齒を鳴らし、悲しみと喜びの一緒にせめぎあつてゐる胸を抱いて着物の上からかきむしる。

花がさく　花がさく

どこにさく

山にさく

里にさく

野にもさく

声はいよいよ張り高く、音律を狂はしたまま、つづいて行く。

「律子さん、相かはらず見事な髪してられますなあ」

長い東京の生活にも京訛を意識して残してゐる津留子が言つた。

律子は津留子の鏡台を借りて、その前に坐り、肘まであらはにした腕を頭の上まで上げて長い髪を逆手に持ち櫛に力をこめて、搔き上げてゐた。櫛の齒に深く梳すかれる度に秋の朝の陽ざしに艶のある毛筋が鮮かに切りたつて見え、高く鬘を結び上げた律子の額際に、険けんのある美しさが添つた。

津留子にとつて、昔は、律子は義弟の妻であつたが、十数年前に突然義弟は死に、律子は男の子一人を連れて、広島の方へ縁づいて行つた。今度上京して来たのはその子の大学院に入るについての相談であつたが、二人の間ではやつぱり「律子さん」「お嫂おやえさん」といふ言葉使ひが自然に通ひあつてゐた。

格別気が合ふといふでもなし、特に世話になつた仲でもないながらに、ある一つの場所だけで口にしなくても心の通じあふ一点があるのだつた。それはもう他所よそのひとつになつて何年目かに顔を合はすだけの現在でも、逢へばすぐに二人をきつちりかみ合はせる楔に役立てた。

「いゝえ、お嬢さん、見事どころですか、あの時分の半分に減つてしまつて……何しろ二人もあつちで子供を生んでゐますものね。うるさいからいつそ、切つてしまはうと思ふんですけど、やつぱりね、うちの今の商売が商売でしょ。お客さまが私のこの髪にも馴染んでおいでなんで、どうもね」

律子は手際よく括めた鬘に秋らしい菊の牙彫りの簪をさし込んでから、背にかけた手拭を縁側ではたはたきながらいふ。旅館を兼ねた日本料理の店を出してゐるのが今の律子の家の商売であつた。堅気な会社員の妻だつた律子がよくさういふ店のきりもりの出来る女になつたと、それを、津留子は半分律子の今の夫の器量にして、うなづいてみる。ここの家の末息子^{おかみ}の嫁でゐた頃には髪こそ人並みはづれて長く豊かだつたが、兎角愚痴が多く、夫との間も何となくしつくりしない冴えない女ぶりであつた。

「そりやさうでせう、ああいふお店では女将^{おかみ}さんの人気といふのも売物の一つですものな」

津留子は軽く受けて、

「けど、健ちゃん一二年見ないうちにえらい背が高うなりましたなあ。昨日玄関に立つてるの見たとき、私どきつとした。死んだ清行さんがそこにゐられるやうで……」

「さうお思ひになる？」

律子は掌にまるめた髪埃を紙にひねつて、屑籠に捨てながら、嫂の顔を見ずに言つた。

「ええ、私でさへさう思ふもの、律子さんは猶更でせう……」

「さうですわね。普段みてますから、お嫂さんがお思ひになるほどではないけど……でも時々はね、さう、やつぱりはつとしますわね」

律子はそこで眼を上げて津留子を見、又臉を伏せた。

「考へますよ。あれからあの子一人を守つて、未亡人でずつと暮らしてゐたら、かういふ時、はつとする気持ちも、多分今とは違ふんだらうなんて」

「でも」

津留子が押し返すやうに言つた。強い口調だつた。

「でもそれは仕方ないわ。あの場合、あなたがああして、この家を出たいふこと、健ちゃんまで連れて、来てもいいといった今の御主人、えらいお人や私今も思うてますわ」

「それはさうですの……あのまま、私がひとりであの子と二人で、このお家と縁の切れない生活をしてゐても……」

律子は又、眼をあげて、真つすぐ津留子を見た。強い、ゆるしのない眼であつたが、それを快くうけとめる親和力が津留子の側にもあつた。

「決して仕合せにはなれないことがわかつてゐましたもの……お嫂さんの場合とは違ひますわ」

「私だつて、仕合せなど一生縁のない暮しや思つてます。唯、主人が世を張つてますし、子供たちもゐますよつて、辛抱してゐるだけのこと……それは律子さんが一番よく知つての筈やありませんか」

律子は津留子の言葉に納得したやうになづいた。

「健ちゃん、今度、うちの大学の大学院の試験受けられるさうやけど、そりや多分成績がよいから通るとして、四年は東京暮らしいふことになりそうですなあ……昨日はよううかがはなんだけど、あちらの店は、次男の方でもつがれることになるんですか」

「ええ、主人は健にあとを継がせてもいいつもりだつたんですけど、あの子にその氣がまるでありませんし、やつぱりお父さんといふよりこちらのお兄さまに似たところのある科学者タイプなんです。どうしても、生物学をやり度いつていひますから、学校を出るまで何とか面倒をみてあとは当人次第にさせようと御相談に上つたわけなんです」

「そりやもう、主人にしても実の甥のことですから、心配するのは当り前ですけれども、でも、律子さん、東京に居着くやうになつても、健ちゃん、うちにはあんまり、始終来られない方がいいと思ひますわよ」

津留子の切れ長の眼尻は柔和な微笑に撓しなつてゐたが、律子は訝し々した瞳に見返して、
「そんなことお嫂さん、今更おつしやらない方がいいわよ。お化けの凄みつて知らないうちに襲ひかかつて来るところにあるんぢやありませんこと、この頃の子は漫画とか劇画とかつてお化けの種類も大分變つて来たやうだけれども、私たち、若い時分に見たお化けの怖さは、そこからぬけ出すのに、半分生命がけでしたものね。いえ、そのために、生命を亡くしてしまつたひとだつてあるんですから……」

律子はそのまゝいふと、津留子が驚くほど甲高い声を立てて笑つた。

「律子さん、あなた、まだあの時分のことを忘れられずにおいでなのね。さうでないなんて言つても駄目、声の調子が証明してゐるわ」

「お嫂さんは強い方ね、私の逃げ出した化物屋敷にずっとあれから二十年近くも住みつづけてゐられるんですもの……悪いけど、そのうちにあなたが二代目のお化けにおなりになるわ」